

条里の「形」—パターン化を通しての変容過程の分析—

建築デザイン研究室 A99T325 福島 ちあき

1. はじめに

条里制とは古代の耕地整備計画で、耕地を基盤目状に区切り、田の正確な位置・面積を把握するためのものであった。それは現在でも都市基盤に深い影響を与えており条里地割の上に現代の市街地が成立しているという状況も幾つか見られる。このように条里制とは過去のものではなく、現代でも生きていて考えることができる。本論文は、この条里制の幾何学的な基盤目という「形」に着眼した研究である。

2. 研究について

現代に残る条里制の形を見ると、その残存状況は多種多様であることが分かる。しかし、それには幾つかのパターンがあり、ある規則が存在するように思われた。そこで本研究では、条里制施工地の事例を収集し、条里の形が時代を追ってどのように変形しているかの分析を行った。条里制の既往の研究は、主に歴史地理学の分野でなされているが、その研究は条里地割の復原が主であり、形そのものとそれが物理的な面で周囲に及ぼす影響に視点をおいた研究はあまりなされていないように思われる。事例収集に用いた資料については、取り扱う地域の偏りが無いように、また、資料密度の差が生じないようにするため、条里制研究会から出版されている事例集『空から見た古代遺跡と条里』（大明堂 平成9年発行）を基本文献とし、それに加えて、条里制研究の論文数冊を用いて事例を収集した。

3. 事例の分析

収集した事例のうち、残っている地割から条里制の施工当時の形がある程度わかるもの、あるいは復原されているものを選定し、さらに条里制と他の要素の先行関係が判明しているものを分析の対象として用いた。こうして収集した事例は合計58件である。はじめに、選定した全事例を分析したところ、条里の形とは、単独で完結しているものではないことが分かった。その形は、多くの場合、計画地に既に存在していた要素（山・川・都城・古道など）による影響を受け施工当初から変形し、さらに、条里施工後に介入する要素（道や市街化など）により、その後も変形を繰り返すのである。

従って、それら要素の先行関係に着目して、事例における条里の変形過程の分類を行った。この分類はある事象が起こった時の条里の変形の仕方を、その変形を引き起こした要素との関係からパターン化したものである。まず、条里の変形の原因となる事象を分類したところ、以下の4つがあげられた。

- 既に要素が存在している地域に条里地割を施工する。
- 条里地割が施工されている地域に要素が介入する。
- 郡・村境において異なるプランの条里地割が出会う。
- 地割の再施工が行われる。

これらの事象が起こった時、条里の形は変形を起こすのであるが、その結果できる形は一樣ではなく、詳細に見

れば二つと同じ変形はない。しかし、ここで条里という大きな形に視点を置くと、その変形は幾通りかに分類することができる。

次に、それぞれの事象についての分析とそれを用いた代表事例を示す。

Aの事象の場合、条里制と要素がお互いに与える影響力の違いから、5パターンに分類できる。

- A-1 要素を基準に条里地割を施工する。または、要素の基準と同一の基準を用いて条里地割を施工する。
- A-2 要素の周囲だけ条里地割を変形させて施工する。
- A-3 要素と無関係に条里地割を施工する。
- A-4 施工された条里地割で要素が変形する。
- A-5 条里地割で一掃される。

このとき、A-1から5にいくほど、条里の形の力は強く既存の要素の変形度合いは大きい、または要素自体が消滅することもある。したがって、逆に条里の形の変形度合いは小さくなる。A-1からA-5によって形成される土地の形は図3のようになる。



図1 事象Aの概念図

図2 事象Bの概念図

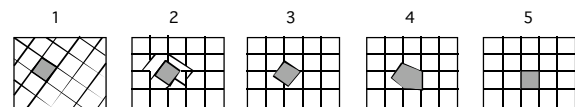


図3 形成される「形」の概念図

Bの事象でもAと同様に5パターンが考えられる。

- B-1 介入した要素を基準に条里が地割再施工される。または、条里が消滅する。
- B-2 要素の周囲だけ条里地割が変形する。
- B-3 条里地割に無関係に新たな要素が置かれる。
- B-4 新たな要素が条里地割に合わせて変形する。
- B-5 条里地割の区画に合わせた要素が置かれる。

この場合も、事象Aと同じように1から5にいくほど条里の形の力は強い。そして、形成される土地の形は、同じく図3で表される。

このように、A、Bの事象で形成される形は同じものを考えることができる。しかし実際の事例を見てみると、これらの形が一樣に形成されるわけではない。Aの事象では、その地域の中心的な要素を基準に条里が施工されA-1の形となり、基準とならなかった他の要素の周囲はA-2の形をとることが多い。一方、Bの事象では、先行する地割の影響力は強く、そこに置かれる要素は地割に則る形B-5あるいは、一部が条里に沿う形B-4となることほとんどである。このことから、一般的に、新しく要素を投入する際には、それを先行する要素の何らかに関連

づけようとなることが分かる。

次に事象 C は、郡や村の境界において異なるプランの条里がぶつかる場合である。条里より後に境界が設定される場合は、その界線を境界として利用することが多いので、地割の衝突は生じない。しかし、先に境界が設定されており後に条里地割が施工される場合には、方向や基線が異なる条里が境界において出会うということが発生する。これらが河川など物理的な境界であれば、複雑な地割は形成されない。ところが、この境界線があいまいな地帯であった場合の境界付近では、互いの条里地割が主張し合うので、複雑な地割形態が形成されることが多い。そして、このことから、条里を土地把握の手段として利用するという意識の強さがうかがえる。

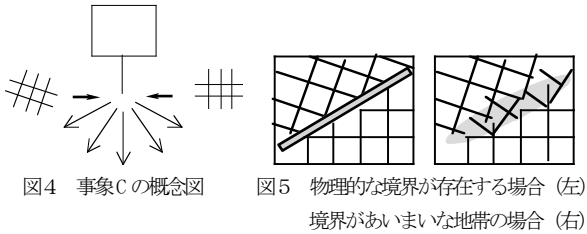


図4 事象Cの概念図

図5 物理的な境界が存在する場合(左) 境界があいまいな地帯の場合(右)

D の事象では、地割を再施工するとき2つのパターンが考えられる。D-1 以前の地割を踏襲する。D-2 新たに別の基準で地割を敷く。

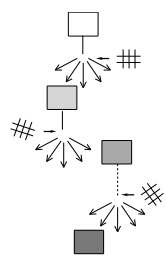


図6 事象Dの概念図

以上の分類をふまえて分析した事例の紹介を行う。

事例1 「嶋上郡の条里」 摂津国嶋上郡は現在の大阪府高槻市芥川周辺である。ここでは条里施工前に北で 20° 西に偏する方格地割が、古代の官道である山陽道を基準に施工されており、さらにそれに沿う古代寺院などの遺構も散在していた。しかし、その後それとは別の基準でほぼ正方位の条里が敷かれ、そして、条里施工後は多くの要素が条里に沿うように投入されている。現代の高槻市では、この条里の方向と区画を受け継ぐ要素が多く見られる。一方、山陽道は近世に西国街道となり、直進性は失われたものの方向は条里以前の方格地割を継承したため、現代でもその方向の道路を見ることができる。



写真1 嶋上郡の条里

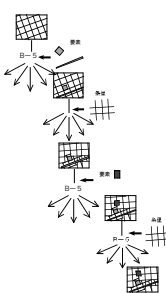


図7 嶋上郡の分析図

事例2 「静岡平野の条里」 静岡清水平野では古代において東海道を基準に広域条里が施工された。この条里は近代の耕地整備の直前まで残っていたが、一部では方格軸の方向性が異なったり坪の形が菱形状であったりする変形条里や、近世新田開発地割や中近世の町割のような非条里地域も存在している。これは、地割が再施工される際、洪水によって消滅した条里地割の受け継がれ方が異

なったためであると考えられる。つまり、先行条里を踏襲したか、地割という形態のみを継承したか、または継承しなかったかで形成された形は地域によって異なるのである。また、古代の東海道は、先の嶋上郡と同様、近世には直進性を失いその元の形は消滅するが、現代のJRの路線は恐らく意識せずにこの形を継承している。このように無意識に先行要素の形を継承し、時代を越えて関係している場合もある。



写真2 静岡平野の条里

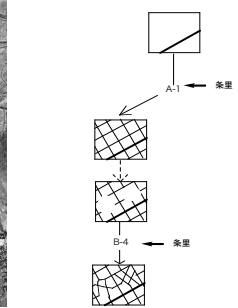


図8 静岡平野の分析図

4. 考察

以上の分析の整理をしてみると、条里の変形の起因となる A~D の各事象について、幾通りか変形パターンがあり、その都度、土地の形は変形していることがわかる。この一見複雑に思える変形過程は、時間の層に分解して考えると、パターンで表されるように、ある規則の元に成立っている。そして、その規則とは、新しい要素が投入される際には、先行する要素に対しての何らかの関係づけを行いその形を継承していくというものである。先行要素が持っている可能性により投入される要素が受け継ぐ形は幾つかあり、さらに投入される要素の種類によっても幾つかのバリエーションが生じる。従って、これらの選択肢の組み合わせによって事象が起こったことで形成される形は様々なものとなるのである。(図9) 例えば、条里の形に投入される要素は、条里の方向のみを受け継ぐこともできるし、その区画にはまることもできる。また、その要素が寺院であるか、道路であるかによってもできる形は異なってくる。

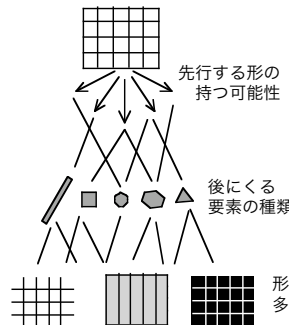


図9 幾つかの選択肢

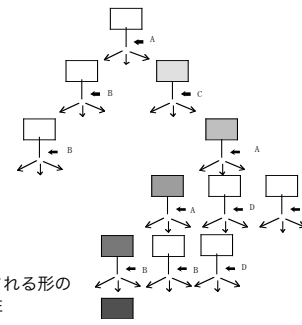


図10 時間軸上の連鎖による変形

5. 結論

計画当初は単純な形であった条里の形が、現在多種多様な形で残っているのは、その後に投入された要素の受け継ぎ方が幾つかあったためである。つまり、条里は計画当初の機能を失っても、時代の変容に合わせて機能を変化させながら、形は幾つかのパターンで継承されてきたのであり、それが時間軸上で連鎖することにより現在残っている条里の形は多種多様なものとなっているのである。(図10)